



傘屋のおぢいさん

硯山子

むかし〜或る田舎の小さな村に一軒の唐傘屋が
 ありました。此家のおぢいさんは毎日〜お天気は
 かり気にして少し曇りでもすると百年も日が照ら
 ないかの様な氣になつて早くお天気になつて、そ
 して、なるたけ風が澤山吹けばいゝなと云つて居
 りました、たとひお天気が百年續いて雨が一寸も
 降らず田や畑が乾上つてお米も取れず大根も出来
 ないでも、自分の家の唐傘さへよく乾けば少しも
 困らないと云ふ風で誠に慾ばりな、そして自分勝
 手な人でありました。

或年のこと夏の初めから暑さは焼く様で毎日々々
 赫々と照り續いてちつとも雨が降らず、おまけに
 毎日〜風がフュー〜と吹き續けて居りました

ので傘屋のおちさん大慌び。

「是でこそ豊年ぢや今年は傘が澤山出来るぞ、そしてウント儲けて遣りませう」として

一人言を云つてはくく喜んで居ました。

さて或日のこと朝から大變な風で、外は埃り塵とで往來の人は目が開けない位でありました。が悦んで居るのは傘屋のおちいさんばかり

「いゝぞく斯う云ふ風でなくては傘が乾かない、

ドレ今日は澤山波して遣らうか」と云ひながら出したく此間中から造しらへ溜めて居いた唐傘をウント出して、皆廣げて干しました、けれど風が強いのでいくら縛ばつて置いてもちぎりに飛んで行つてしまふには流石のおちいさんも弱りましたのが暫く考へた末

「ア、いゝ事がある斯うして遣らう」と云ひながら干してある傘を何れも是れも皆細引でしばつて其端を集めて自分の帯に確かりと縛ばつてしまいました。して「ア、是で宜しい、斯う

して置けば飛んで行つても直ぐ判る！」と言つて居りました。

スルト一時間も経つたかと思ふ頃、裏の松山の上から恐ろしい風がゴ—と云つて吹いて來たかと思ふ間に澤山の傘が一時に飛び出してフ—と空の上の方に吹き上げられました。おちいさんは傘の端に結ばつて居ましたからたまりません。「ア、く」と云ふ間にブ—イと天竺の方へ吹き飛ばされて行きました、家のおかみさんや隣の田吾作さんはアツと云つたまゝ、呆氣に取られて見て居る丈けで何うとも仕方がありません、其中に傘屋のおちいさんは雲の上のく上の方へ傘と一所に飛ばされて遂に鳶よりも小さくなつてしまいました。

是を聞いた村の人は
「ア、何うも悪いことは出來ないものだ、何うだ傘屋のぢいさん、あんまり自分勝手ばかり祈つて居たものだから、遂々罰が當つて大風に吹き飛ばされてしまつた、多分今頃は何處かの谷へ

吹き落されて岩に打つかつて死んでしまつたら
う、可哀相なものだ」と噂さをして居ました。
此方は傘屋のぢいさん風に吹き飛ばされて雲の上
に空で見ると、廣い／＼原の様な所で何方を見て
も何んにもありません少し歩いて見ると其處に雲
の切れ目がありましたから、そつと窺いて見ると
遙か／＼下の方に富士山が見える様ですが其外の
山も池も畑もトント判りません、見て居る中にゾ
ットして來て今にも落こちそゝですから急いで退
いてしまいました。

だん／＼歩いて行くと何處迄行つても家がありません
其中に日が暮れかゝてあたりが暗くなり始め
ました時、遙か向ふの方に燈火が見えました。
「オヤ／＼家がある様だ、早く彼處へ行つて止め
て貰らうと、獨り言云ひながら急いで行きます
と小さな茅葺の家でした。そして門口に小さな
表札が掛けてあります。見ると「かみなり」と書
いてあります。

「オヤかみなりとは妙な名前だな、一体此處は何
んと云ふ所だらう」と云ひながら
「御免下さい。」と云ふと
「ハイと云つて可愛らしい聲がして可愛らしい女
の子が出て來ました。
「誠に申し兼ねましたが、私は風に吹き飛ばされて
參つたもので御座います、何うぞ、一晚お宿め
下さる譯には參りますまいか」と云ひますと其
に女の子は愛相よく
「エ、御入りなさいませ、此處には外に家があり
ませんから晝か困りませう、お父さんは今留守
ですが宜しう御座いますから御入り遊ばせ」と
云つて呉れました。
傘屋は悦んで家の上つて足を伸して漸く休んで居
る中に主人が歸つて來た様です。そして先きの娘
と話して居ります。
「お父さんお歸り遊ばせお留守に下界から傘屋の
おぢいさんが來ましたよ」

雷「ソノカあの慾ばりぢいさんか、道理で今日傘と一所に飛んで居たつけ、時に晩の御飯は何うしたハ」

娘「アノ、人間には飯べられまいと思つてまだ上げませんでした」

雷「それでもいゝから飯べさしておやり」と云ふ話が聞えました、暫くすると先きの娘が出て来て

「お容様御飯を召し上がれと」云ひますから後をついて行きますと大きな爐の傍にお膳が出て居ます、何の氣なしに其向ふを見ると是は恐ろしい畫にかいた雷り様と同じ様な角の生へたこは鬼が虎の皮の上にあぐらかいて座つて居てギラ〜と光つた目で睨んで居る様です。傘屋のおぢいさん之を見て喫驚仰天してドシンと我知らず尻餅をつきました、雷様の笑ひ聲と娘のやさしい聲で

「私のお父さんよ、恐はくはなくつてよ」と云ふ

ので漸く安心してお膳の前に坐り雷様に挨拶して御飯を戴うとしまして先づお茶椀の蓋を探るとコハマお何のことでせう、御飯だと思ふつたら細かい石ころです、次にお平を開けて見ますと是は又何んだか田にしの煮ころばしの様なものです、何んですかと娘に聞いて見ますと人間の子供のお臍佃煮だそをです。イヤハヤ迎も食べられた代ものではありませんが、何か外に無かるうか、向ふにあるのは何んだらうと見ると赤いきれいな色をしたお刺身です、何んの刺身ですと聞くと虎の肉の刺身と云ふ、仕方がないから

「まゝ是でも食べて見様と一口食べましたが堅くてまづくて迎も食べられませんが。お腹はすいて居ますが仕方がありませんからいゝ加減にして止めました。

「御馳走様」と云ふと雷は聲を掛けて

「何うだねおぢいさん。風が吹いてよかつたらうそして此處の御馳走は甘いだらう、こんないゝ、

處は外にはあるまい、其上此處はひどい風が吹くよ、それこそおちいさんの好きな大風が吹くよウツカリ外へ出様ものなら雲の上から放り出される位だよ」と云ひますので流石のおちいさんも今日と云ふ今日は閉口して

「ア、何うも今迄自分勝手なことばかり考へて居て誠に悪う御座いました。もう是からは決して自分勝手なことは致しません。雷様御情で御座います。何卒私を下界迄御連れ下さいまし」と頼みますと、雷は笑ひながら

「ハ、ハ、夫れは出来ない。私は下界には行かない。うつかり行かうものなら歸れないもの、おちいさんも可哀そうだが仕方がない。自業自得だ。今更悔んでも仕方がない泣いたつて笑つたつて歸れやしないよ。まああきらめて私の手傳ひでもして居いで、其中には又時機もあらうからと云ふのでおちいさんも家に残したおかみさんや子供の事など考へて、泣いて居ましたが

仕方がありませんから觀念して雷のお手傳をするに致しました。扱て翌朝になつて朝飯をしまうと雷は仕事に出掛ける仕度です。見れば大きな太鼓を背中に負つて四つの手には夫れ々々大きな撥を持つて居ますし腰には石ころのおひすびに臍の佃煮の御辨當を持つて居ます。そして

「おちいさんサア行かう、是を持つて来てお呉れと云ふのは何かと思つたら大きな風呂敷包みです」是は重いなと思つて持ち上げて見ると何の存外軽くつて丸で風船玉の様ですハテ不思議なもの、何んだらうと思つて

「雷様は何んですか大層軽う御座いますね」とさゝますと、

「ソーサ夫れは風と雨の袋だものそれを開けると風が吹いて雨が降るのさ」と云ふ事です。

ソコでおちいさんは風と雨とを降らす役目になりました。是からおちいさんは雷の後をついて歩い

て雲の切れ目を見ては雷が太鼓を叩くとおぢいさんが袋の口を少し開けて風を吹かせます。見て居ると下界では遠かの夕立に大騒ぎ、下女がはたしで飛び出して干し物を仕舞ふ家もあれば傘がないので頭を縮めて走る旅人もあります。

おぢいさんは面白い〜と悦びながら段々歩いて来ると又一つの切れ目がありました。何の氣なしにのぞいて見ると丁度いゝ事に自分の村の眞上なのでおぢいさん我知らず聲を出して

「ア、私の村の上へ来ました、雷様御覽なさい、

彼處が私の家です」など話して居る中に

おぢいさんは心の中で此間中からの村の早魃の事を思ひ出して

「ウ、い、事がある村の人に此處で雨を澤山降ら

して遣らう』と思ひながら、雷様に

雷様、私の村では此間から早魃で困つて居ますから此處で澤山降らせて遣つて下さい』とお願

ひをすると

「ウン宜しい、けれど袋の口は少し開けるんだよそして今迄よりは少し長く降らせればソレで澤山だ、それからおぢいさん氣を付けないと落ちてぢるよ」と云ひました。けれどおぢいさんは

「なんだ、けちな雷だな、村ではもと二月も三月も雨が降らないで困つて居るんだ。構ふものかだまつで袋の口を大きくして澤山降らせて遣れ」と口の中で云ひながら雷の鳴るのを待つて居ると

雷「サア支度はいゝかへ始めるよ」と云ひながら腰の火打石をぴかりと光らせて太鼓をゴロ〜と打ちます、おぢいさんはソレ来た」と袋の口を下に向けて口一杯に廣げたから大變、そこら中の雲も霧もフーッと吹き飛ばされおぢいさんは眞倒さま地面へ向つて落ちて行きました。

下の村では又エライ大きな雷が鳴つたと思つたら恐ろしい強い雨でザツと云ふ勢は丸で瀧の落て来るかと思ふ様で今迄乾ききつて居た川も池も忽ちに溢れだして田も畑も一時に押し流しそれでも

止まないで家でも倉でも木でもお宮でも皆んな押し流しました、何にしる俄かの水ですから何うにも仕方がありません、可哀そうに村の人は大概家と一所に押し流されて猶一匹残つたものはありません。頓がて雲が晴れて日が照り始めた時に見るとなさけないではありませんか今迄然しも立派な村であつたものが一面に泥だらけな原になつてしまいました。

丁度此村雲から吹き落されたおぢいさんはドシンと云ふ音と一所に此野原の真中へ落ちて來まして暫の間おぢいさんはウン」と云ふたさきり氣絶して居ましたが頓がて氣が付いて見るとあたりは泥の原で家は勿論の事木一本草一つありません、おぢいさんは

「オヤ〜厄介な所に落ちたもんだ、何うせ落ちるなら自分の村か自分の家の前へでも落ちればよかつたな」など、又しても自分勝手な事を云つて居ましたが、何しろ方角も何も判りません

からい、可限に歩いて行きますと向ふから大勢の人がガヤ〜云ひながら遣つて來ました。見ると一番先きに立つて居るのは隣り村の親類の佐平さんです。おぢいさんは喜んで

「コレハ〜佐平さん、いゝ處で御目に掛りました。私の村へ行くには何う行のですか」とき、ますと佐平さんは驚いたの驚かないのつて尻持つくばかりに驚いて

「ヤ、傘屋のおぢいさんぢやないか、お前さんは此間風に吹き飛ばされて、も居ないと思つたのに今迄能く生きて居ましたね。それはそをと先きの暴雨はマア何と云ふ強い暴雨でせう。おぢいさん〜、此處がおぢいさんの村ですよ」と云はれても一向譯が判りません。段々と話を聞いて見ると先きの雨で自分の家もおかみさんも子ども皆流されてしまつた事が判つておぢいさんはオイ〜聲を上げて泣きましたかもう追つ付きません。遂々おぢいさんは佐平の家の厄介者になつて淋しく一生を暮すことになりました。